

平成31年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	東京藝術大学演奏芸術センター	
施 設 名	東京藝術大学奏楽堂	
助 成 対 象 活 動 名	普及啓発事業	
内定額(総額)	2,714	(千円)
公 演 事 業	0	(千円)
人 材 養 成 事 業	0	(千円)
普 及 啓 発 事 業	2,714	(千円)

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>本公演は、2011年から毎年行われていた「藝大アーツスペシャル・障がいとアーツ」の趣旨を昇華させた新企画として、人間の多様性が生み出す超感覚を「七感（ななかん）」と名づけ、視覚・聴覚・嗅覚など様々な感覚に働きかける舞台を創り上げたものである。</p> <p>8年間の積み重ねにより藝大が蓄積した知見と経験を活かし、障がいの有無を超えて誰もが楽しめる見せ方・聴かせ方を多方向からバリアフリーに開き、また障がいのある方々が芸術を鑑賞するだけでなく、自らステージに立ち表現する場を創出することを成功させた。</p> <p>障がい者を対象とするワークショップやイベントのほとんどはその場かぎりのものであるが、本事業は、公演までに5回のワークショップを実施し、継続的に段階を踏んで綿密な計画のもとでゴールを目指すことによって、参加した障がい者の大きな「自信」と「達成感」を育む事が出来た。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>障がい者及びその家族は、声が出てしまう事や静かに着席出来ない事、聴覚障がい者の場合は、音を聴く事が困難であったりと通常のコンサートに足を運ぶ事が困難と考え、消極的になるケースが非常に多い。いかに彼らに参加して貰い易く企画構成を行うかという事が一番の課題であったが、本イベントでは、「ハンディキャップ」や「障がい」といった言葉を一切排除し、障がい者手帳所持者が割引で購入できるチケットを幅広い意味を持つ「アクセシブル」という言葉を使用し、「アクセシブル券」という概念を作った。</p> <p>さらに東京藝大が有する若手研究者・若手芸術家を教授陣がサポートし、若手研究者ならびに若手芸術家に発表の場を提供するという人材育成の意義も兼ねるイベントとなった。</p> <p>また、東京藝術大学 COI 拠点参画企業であるヤマハ株式会社の若手研究家が音響設計に携わり、株式会社テレビ朝日・技術局コーポレートデザインセンターの美術スタッフがデジタルアート制作や会場装飾に携わり、聴覚障がい者のための磁気ループを提供した東京ワセダロータリークラブに属する 30 歳以下の若手活動家グループ・ワセダローターアクトクラブのメンバーが、ワークショップの見学や磁気ループ設置補助を行なった。</p> <p>大学と企業がそれぞれの得意分野を持ち寄った事により高い舞台芸術作品の創作が可能となり、このような産学連携により、芸術を社会実装することに成功した。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

障がいの有無を超えてあらゆる人が楽しめるイベントは一般的に無料公演であるが、今回「七感で楽しむシアター」は初の有料公演に踏み切った。しかも障がいのある人々が観客として受動的に参加するのではなく、「表現者」として能動的に参加できるイベントであり、なおかつ高度な芸術性を保持することを理想とし、全席完売という高い目標を達成することができた。

合計 140 枚のアンケートが集計出来、有料入場者 525 名の内 26.7%という高い回収率だった。

第 1 部では東京藝術大学で学んだ若手演出家を起用し、詩の言葉のニュアンスを手話とダンスで表現する「サイン・ダンス」という新しい表現方法を開発した。本番に至るまでには、8 月に横浜市立ろう特別支援学校にてダンスと美術のワークショップを複数回行った。聴覚障がいを持ったダンサーによって、サインダンスの創作を小学部の児童と共に行ったが、近年補聴器の普及によって手話のできる児童が減少する中で、表現としての手話を共に考える貴重な機会となった。また、美術のワークショップでは美術部の生徒たちによって緻密で豊かな表現力の鳥を粘土で造形した。造形した粘土は後日、藝大の学生によって着彩作業が行われた。

これらのワークショップの積み重ねによって作り上げられた造形物や映像は、藝大・映像学科の若手研究者によってアート作品化され、生演奏の音楽に合わせる形で舞台奥の紗幕スクリーンへ投影された。聴覚障がいのある方へ音楽のニュアンスを届けるという永遠の課題に対して、詩とダンスの融合によるサインダンスは、ろう者と聴者が双方から歩み寄るための大きな手がかりの一つとなった。

また音楽があらわすイメージを彷彿とさせる「香り」を開発・展示し、視覚障がい者に嗅覚から音楽を味わってもらう工夫を施した。

第 2 部では現代音楽というジャンルでありながら、日本の伝統芸能である邦楽奏者をキャストイングして邦楽と西洋音楽の融合を試み、聴覚障がい者のために音を視覚化する映像アプリを開発・投影した。邦楽器と西洋楽器、伝統と革新、音楽の視覚化、映像の音響化、美術、舞踊、音楽、映像などマルチカルチャーが交差する東京藝大ならではのコンテンツを創出した。

舞台創作への参加者数も、目標値を大きく上回る人数となった。舞台上に投影される映像や舞台装置の制作に参加した各支援学校の児童生徒たち、奏楽堂ホワイエの装飾に参加した福祉施設にて絵画創作活動を行うアマチュア・アーティストたち、さらに観客全員に光るリストバンドを装着させたことによって、満場の観客が舞台上のパフォーマンスの演出にインタラクティブに参加することとなった。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

【計画】

- ・計画当初の事業期間（実施期間（事業開催期間））

演奏会実施日：2019年12月1日（日）

- ・収支予算

6,770,000円（要望書提出時・税込）→11,991,000円（交付申請書・税込）

－想定入場者数の根拠・・・（見込み）一般入場料 1,000円×500人

－戦略（販売計画、広報計画、属性把握、料金設定等の増加策や削減策等）

- ・・・障害者手帳をお持ちの方は入場料半額、障害者手帳をお持ちの方と介助者とのペア券の設定等

【確定、実績】

- ・確定した事業期間

演奏会実施日：2019年12月1日（日）

- ・収支決算

12,651,673円（実績報告書・税込）

- ・総入場者数（有料入場者数）

784名（有料入場者数：552名）

- ・（計画から比較して、変更や乖離があった場合）変更理由、乖離理由

文化庁本事業への申請後、アーツカウンシル東京「Tokyo Tokyo Festival 2020」にエントリーすることが決まり、アーツカウンシル東京からの助成金額（5,978,000円）の約2倍規模で事業を行うことになったため。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

音楽、美術、映像など多彩な芸術を融合し、インタラクティブなデジタルアートや立体音響スピーカーを純クラシック音楽のコンサートに持ち込み、なおかつ「社会包摂」を実現した有料のイベントは「七感で楽しむシアター」が初と言え、それは東京藝術大学が2011年から8年にわたり「障がいとアーツ」研究を積み重ね、なおかつ多分野のプロフェッショナルなアーティストを有しているからこそ成し得るものである。

多くの障がい者が出演者として（プリミティブな形ではなく、高度な次元で）参加できるインクルーシブなイベントは、機会の提供においても開催ノウハウにおいても安全面の確保においても、他の公共ホールやイベント制作会社が簡単に真似できる物ではまったくない。東京藝術大学の社会包摂事業への長年の取り組みと知見の蓄積に基づくものである。

文化庁劇場音楽堂等活性化事業の採択のおかげで、リオパラリンピック閉会式出演の義足のダンサー大前光市、世界的作曲家の藤倉大への新作委嘱、ヨーロッパで活躍するピアニスト児玉麻里、児玉桃という豪華アーティストが1日に集まるという夢のキャスティングが叶った。

藝大の奏楽堂では初の複数のスピーカーの設置による立体空間音響設計は、奏楽堂全体を音楽が包み込む様な、まさに七感的効果をもたらした。また大型娯楽イベントでよく使用される光の演出を持ちこみ、来場者ほぼ全員にLEDリストバンドを装着させ、舞台上のダンサーが制御センサーを動かすと客席の来場者の手首が光ると言う、クラシック音楽では異例のインタラクティブな革新的な演出方法を提示する事となった。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

第1部では東京藝術大学で学んだ若手演出家を起用し、詩の言葉のニュアンスを手話とダンスで表現する「サイン・ダンス」という新しい表現方法を開発した。また音楽があらわすイメージを表現する「香り」を開発・展示し、視覚障がい者に嗅覚から音楽を味わってもらう工夫を施した。

第2部では現代音楽というジャンルでありながら、日本の伝統芸能である邦楽奏者をキャスティングして邦楽と西洋音楽の融合を試み、聴覚障がい者のために音を視覚化する映像アプリを開発・投影した。

邦楽器と西洋楽器、伝統と革新、音楽の視覚化、絵画の音楽化、舞踊と映像のコラボレーションなど、マルチカルチャーが交差する東京藝大ならではのコンテンツを創出することに成功した。

参加者数も、目標値を大きく上回る人数となった。舞台上に投影される映像や舞台装置の制作に参加したのは支援学校の児童生徒たち、奏楽堂ホワイエの装飾に参加したのは福祉施設にて絵画活動を行うアーティストたち、さらに観客に光るリストバンドを装着させたことによって、観客全員が舞台上のパフォーマンスの演出にインタラクティブに参加することとなった。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

東京藝術大学が有するコンサートホール「奏楽堂」は、旧東京音楽学校奏楽堂に替わる施設として、輝かしい歴史を持つ旧東京音楽学校奏楽堂を継承する施設として、平成10年3月に新しく建設されたものである。併せて新設された演奏芸術センターの事業を核として毎年様々な事業を展開している。学生たちの日頃の修練の成果披露から、本学の特徴を生かしたさまざまな企画によるコンサートを開催しており、社会に向けての芸術文化の情報の発信基地としての役割を担っている。

今回の事業においては、昨年度までの「藝大アーツスペシャル 障がいとアーツ」の体制を踏襲し、本学が有するコンサートホール奏楽堂の企画制作を司る演奏芸術センター、演奏企画室と、文科省とJSTによる産官学連携プロジェクト「センター・オブ・イノベーション」の拠点に認定された東京藝術大学COI拠点とが、運営・企画・制作を分担し、効率的な連携をとることができた。

また、劇場は、芸術文化発信の拠点であるばかりでなく、街づくりや地域コミュニティの再生の役割を持った「社会包摂」の担い手となることが求められていることにも、大学組織として最大限に応えることができたと思う。

本イベントに協力した施設や学校は、筑波大学附属聴覚特別支援学校、横浜市立ろう特別支援学校、横浜市立盲特別支援学校、社会福祉法人愛成会、青山学院大学総合文化政策学部、金沢大学「子どものこころの発達研究センター」など全国各地に及ぶ。協力した企業・NPO・団体等は、ヤマハ株式会社、ベネッセこども基金、テレビ朝日、台東区手話通訳者の会、長野大学ノートテイクサークルこだま。後援は横浜市教育委員会である。

これらすべての団体・組織が連携し、共に一つの芸術イベントを創り上げた。

今回制作された「七感で楽しむシアター」は事業化・コンテンツ化され、地方自治体の施設との連携により外部での開催や定期的な継続も可能になると予想される。